

チェルノブイリ通信

<https://www.cher9.org/>

NPO法人
チェルノブイリ医療支援ネットワーク
〒812-0013 福岡市博多区博多駅東2-5-11-5F
TEL/FAX : 092-260-3989
E-mail : jimu@cher9.org



チェルノブイリ医療支援ネットワーク（CMN）は、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、現地から求められる医療支援を行います。この活動を通して、日本とベラルーシの人びとの心と心のつながりを深めます。

No.

135

特集 2024年春 福島訪問レポート

CONTENTS

2024年春 福島訪問レポート / 飯舘村の春 / コラム ミンスクの1日 /
リサイクル募金きしゃぼんのお礼とご紹介 / チェルノブイリ支援コーヒー・
紅茶のご紹介 / チェルノブイリ通信ペーパーレス化のお願い /
支援者のお名前とメッセージ



2024年3月11日日の出
(おれたちの伝承館 南相馬市小高区)

オンライン版への
アクセスはこちらから



本紙はチェルノブイリ医療支援ネットワークの活動を
支援して下さっている皆さまへお届けしています。
送付がご不要な場合は事務局までご連絡ください。

あなたもチェルノブイリを支える一人になっていただけませんか？
ご寄付を受け付けています。

ゆうちょ銀行

記号 17460 番号 52319621

他の金融機関からは 七四八支店 (普) 5231962

楽天銀行

ジャズ支店 (支店番号201) (普) 7017104

住信SBIネット銀行

法人第一支店 (支店番号106) (普) 1030416

※口座名はいずれも「NPO法人チェルノブイリ医療支援ネットワーク」

訪問を通して知ったことや考えたこと、感じたことについて報告していただきました。

*訪問中の写真は団体ウェブサイトで公開しています。

訪問中の写真



今回の主な訪問地域

相馬市

飯舘村

川俣町

二本松市

南相馬市

葛尾村

浪江町

双葉町

大熊町

富岡町

楡葉町

広野町

田村市

川内村

二本松市

えりなさい

福島訪問の際によく訪れる農家民宿
さんです！農業体験ができ、採れた
ての野菜を使った美味しい料理がい
ただけです。



富岡町・夜ノ森の去年避難指示が
解除された地区に
バウムクーヘン専門店が
オープンしていました！

A simple line drawing of a beach scene. Two large wind turbines stand on a sandy shore. A small figure of a person is walking on the beach towards the water. The sky is blue, and the water is also blue. A green line represents the horizon or distant trees.

かつて大津波に耐えた
かしまの一本松があった場所。
今は巨大な風力発電が稼働する場所に。
ここで作られた電気は一体どこへ……

堤防の先には帰還困難区域を知らせる警告が地面にありましたがゲートや柵が無く、危険性があまり伝わらない…

A stylized illustration of a traditional Japanese building, possibly a temple or a residence. The building features a dark, tiled roof with a small, square, light-colored structure on top. The walls are white with dark wooden frames around the windows and doors. A large, multi-paned window is visible on the left side. The building is set against a light blue sky.

原祭に関する伝言館があるお寺です。福島県だけでなく、長崎、広島県などについての展示もあり、他では見ることがない貴重な資料を拝見できます。

田中 静瑠（大学四年）

私は今回で5回目の福島訪問となりました。現地の方や福島をよく知る方に福島を案内していただきながらたくさんのお話を聞き、今までとは異なる視点で福島の状態を知ることが出来ました。特に強く感じたのは「安全性への疑問」と、「福島が抱えている安全・健康という観点から離れている部分がある」ということです。現地ではほとんど復興工事が進み、新しくきれいな建物がたくさん見られるその一方で、「安全」という観点がおさなりになっているのではないかと感じてしまう部分がありました。様々な課題が複雑に積み重なっている福島の現在について報告します。



小高駅前の祈念キャンドル

今回は福島に到着したその日が3月11日でした。3.11当日に福島に訪問するのは初めてでした。日が暮れるころ、小高駅前で祈念のキャンドルをともししていました。私たちも火をともし作業に参加させていただき、一緒に黙とうを捧げました。「おれたちの伝承館」でもキャンドルを灯していらいしゃいました。改めて震災に思いをはせる一日となりました。

二日目は、「おれたちの伝承館」館長であり写真家である中筋純さんに案内していただいて大熊町、富岡町、双葉町を見て回りました。少し山を登ると、町の景色、そして第一原発がよく見えました。町を見回すと、たくさんの工事が行われ、常に工事の音が鳴り響いています。2021年には東京オリンピックに際した聖火リレーが行われた場所も見えました。聖火リレーが通過した道の両脇には新しい住宅が立ち並んでいましたが、その奥、住宅からそう遠くはない場所には原発が見えている景色には違和感を覚えました。どれほどの人がこの町に戻ってきて現在住んでいるのでしょうか。町を回ると、まだフレコンバッグがたくさん見られます。現在見られるフレコンバッグの中身は多くが遮蔽土壌で、比較的汚染が少ないため処理が

後回しにされ、町内に放置されている状態だそうです。また、町内の住宅はそのほとんどが取り壊し工事中でした。フレコンバッグに囲まれた、取り壊し中の住宅たちを見ると、復興とはまだまだほど遠いと感じました。



高台からの景色

たくさんの新しい住宅と、第一原発が同時に見えます。

この日は最後に郡山海岸に行きました。堤防の上を歩いていると、「この先帰還困難区域につき通り抜け禁止」の表示が突然現れました。その先に進むとさらに「ここから帰還困難区域につき立入禁止」の表示がありました。フェンスなどがあるでもなく、また、堤防の上のみ表示があるため、海岸を歩いていたら気づかずに帰還困難区域に入ってしまうそうでした。



三日目は、いわき市で原子力災害についての展示や意見交換会などを行っている「原子力災害考証館」の運営などをされている鈴木亮さん、西島香織さんに案内していただき、大熊町、檜葉町、富岡町、双葉町を回りました。最初に訪れた宝鏡寺には、事故40年前から原発に反対し続けていた早川篤雄さん・安斎育郎さんの言葉が刻まれた「原発悔恨・伝言の碑」や「非核の火」のモニュメント、原子力・核についての過去と現在を知る「伝言館」と、未来を考える「未来館」があります。印象深かったのは、「伝言館」で見ることが出来た、原発を誘致、推進していた当時の資料です。「広島の子供たちが野球で活躍しているから大丈夫」といった内容もあり、いかに「原発安全神話」が出来たのかが見ることが出来ました。私は小学3年生の時に原発事故が起きたため、社会が「原発は安全なもの」という意見をどれほど強固に持っていたのかをあまり知りませんでした。この資料を見て、現在の感覚で考えると異常に思えるほど信じられていたのだと感じました。



原発悔恨・伝言の碑



除去土壌再利用の実験場

現在福島県では、8,000ベクレルを下回る土壌を公共事業に再利用する実証実験が行われています。しかし、事故前は100ベクレルを超えるものは管理が必要なものとしていました。80倍もの数値を許容し、ましてや公共事業で全国各地にばらまくのかとお話されていましたが、日本は食品や建築基準など、世界的に見ても安全に関する基準が厳しいと言われることがあります。福島で様々なお話を聞いていると、原発と原発事故の対応に関しては十分ではないのではないかと感じることも多くあります。この土壌再利用や処理水など、原発事故後の課題は福島のみが抱える問題ではないと改めて感じました。日本国民皆で対応を考えていかなければならないと思いました。

西島さんには富岡町の現状についても教えていただきました。廃炉による補助金で、町にはどんどん新しい建物ができ、若い人の移住も増えてきているそうです。しかしこの補助金はいつまでも出るものではなく、いつかは自立して町を運営していく時が来ます。そのとき町には何が残り、どんな町になっているのでしょうか。最終処分場になればまた補助金は出ますが、町の人々は受け入れるでしょうか。持続可能な町づくりがいかに難しいかを感じました。

四日目には、事故後さまざまな食物の放射線量を測り続けている伊藤延由さんにお話を伺い、その後飯館村と浪江町を案内していただきました。今回も具体的な数値とともに事故の影響についてお話をいただき、また新たな気づき、新たに知ることがありました。

飯館村で除染が住んでいるのは村の面積の16%で、その土壌の平均は847Bq/kgだそうです。村の84%を占める未除染のエリアの平均値は20,000Bq/kgを超え、それに比べると除染済みエリアは低い数値ですが、事故前の農地の数値は10〜20Bq/kgほどで、元の数値に戻るまで単純計算でも330年かかります。伊藤さんが採取された野生のきのこに

線量計を近づけると、周りの空間の線量の5倍近い数値が計測されました。少しずつ帰還困難区域が解除されていますが、一步山に踏み入れれば未除染の土があり安心できず、また除染済みの土地も事故前と同じとは全く言えない状況を見ると、今生きている世代にとっては「事故前の村は帰ってこない」と言えます。事故の影響の絶大さをこの数字から感じました。

アメリカでの原発建設についても教えていただきました。アメリカでは万が一の時に備えた避難計画の作成が義務付けられており、この計画が不十分だとして廃炉になったショアハム原発という原発があるそうです。日本では、この避難計画は義務付けられておらず、実際に作成されている避難計画も、複合災害時を想定していなかったりと不十分だと感じられます。実際に能登半島の地震の際にも、半島に続く道は閉鎖してしまいました。もし何か事故が起きていた場合、周辺の住民の方々は逃げることで出来たのでしょうか。

お話の後、車で飯館村と浪江町の一部を回りました。飯館村にもまだフレコンバッグが見られます。村内でも見えやすいところからはフレコンバッグがなくなっていますが、少し山間の



飯館村に残るフレコンバッグ

あまり人が見ない場所にはまだたくさん積みあがっていました。浪江町と飯館村の境目にあたる赤宇木地区では、まだ除染されていない山間部を道が通っていました。他の場所に比べても線量が高いため、私たち学生は車から降りずに待っていました。福島にはまだまだこのような場所がたくさん残っています。

今回は現地をよく知る方にお話を伺うことが多かったのですが、お話を聞いていて「後処理の仕方が決まっていない、扱いきれないものをどうして作ってしまったのだろう」と何度も感じました。浜通りを見て回っていると、放射線の問題がついて回る課題があまりにも多く、考えるのをやめてしまいたくなります。13年の時が経過して、問題が政治・外交・安全・風評被

害など多岐にわたっていて複雑すぎるとも感じます。福岡に住んでいて物理的に遠い私たちは、このような福島の原因を見て見ぬふりして考えないでいることは簡単です。しかし、廃炉や処理水、除去土壌の問題など福島だけの問題ではないものはたくさんあり、また原発も全国各地、私たちの近くにもあります。福島と日本のこれからを考えることから逃げてはいけなしし逃れられることでもないと感じました。私個人が福島に対して何ができるのかという答えはまだわかりませんが、この訪問を通して知ること、また知ったことを伝えることは、私にできる少ないことのひとつだと思います。



平江莉子（大学4年生）

2024年3月11日。東日本大震災発生から13年となる日に、私にとっては今回3度目となる福島訪問がスタートした。この記事では、私が5日間の中で、特に印象に残ったことについて順に書き記していきたい。

まず、福島訪問一日目では、俺たちの伝承館に地震発生の14時46分に合わせ、東日本大震災復興祈念を行った。更に、日没後には双葉屋旅

館に移動後、旅館前にて地元の住民の方々と共にろうそくの点灯を行った。（写真1参照）画像には「3.11 ODAKA 1.1 NOT O 祈り」という、ろうそくの火を使った東日本大震災と、今年1月1日の元旦当日に発生した能登半島地震への、復興祈念を込めたメッセージが表されている。

写真だけからは分からないのだが、実はこのろうそく点灯には、近隣住民達の諦めない姿勢や忍耐力がなければ成功できなかった。というのも、当時ろうそく点灯の際強い風が吹いており、ろうそくに火を灯しては消えるの繰り返しで、一向に文字が浮かび上がらない状況だった。ろうそくの点灯に私達も参加させていたのだが、途中からろうそくの火は合成でも



写真1

いいのではないか。こんなに風が吹いている中では無理だと思い始め、若干諦め始めていた。しかし、そんな気持ちとは裏腹に、地元の方は全く手を止めることがなかった。むしろ、「震災で被害を受けて辛い思いをした人は沢山いるのに、こんなことで諦めるなんて」というような事を言ってる声が聞こえた。それから20分ほどたった頃だろうか、ろうそくに火がつき始め、文字も徐々に浮かび上がっていた。そしてついに全てのろうそくへ火がつき、写真のような光景を実際に目にすることが出来た。

あの時の地元住民の人々の辛抱強さ、根気強さは忘れられない。東日本大震災が発生してまもなく「がんばっぺ」という、復興の意味を込めた東北弁のスローガンをよく耳にしたが、まさしくその言葉通りの姿勢が感じられた。時代が進むごとに技術も発展し、今やスマートフォン1つあればありとあらゆることができるようになってきている。しかし、目の前にある物事に対して簡単に諦め、技術に頼るのではなく、自分の力で解決する、解決しようとする根気強さを身身につけておく必要があると、私は思った。こういった力は、今後発生するかもしれない、南海トラフ地震など、非常時に役立つかも

しない。

次に印象に残ったのは、訪問三日目に散策した、大熊町、富岡町、双葉町の様子だ。案内していただいたのは、写真家で「おれたちの伝承館」館長の中筋純さんだ。中筋さんはまず、写真2のような、原発が見える場所まで案内していただいた。遠目ではあるが、福島第一、第二、第三原発を確認することが出来た。素朴な感想にはなるのだが、外から見ればあの原子力発電所が私達の健康に甚大な被害をもたらすだろうなんてことは、想像がつかないと思った。放射能が目に見えないように、発電所そのものも、目で捕えることはできたとしても、底から危険という言葉にすぐ結びつくような雰囲気は感じられない。だからこそ、未だまだ残されている福島原発を目にすると、被



写真2



写真3



写真4

害状況との差に恐怖のようなものを感じる。

また、この場所以外にも、写真3のような、景色を見ることができるところにも案内していただいた。写真だけを見ると住宅も並んでおり、自然の中における生活感も感じられる。しかし、実際は工事の音が鳴り響いており、これまた景色との差に違和感を感じた。原発事故前であれば、この場所から聞こえてくるのは鳥のさえずりといった、自然音だったそうだった。事故から13年経った今も鳴り響いていたのは工事の音に対して、復興が進んでいないと捉えるべきなのか、長い時間をかけて再生していこうとしているのか、どちらで捉えるのが正解なのか、考えていきたいと思った。

最後に向かったのは、双葉町の郡山海岸である。堤防の先まで進んでいくと、地面に帰還困難区域による立ち入り禁止の提示が見えてきた(写真4)。地面に警告の提示はあったものの、周りに柵やゲートのような仕切りはなく、浜辺から回れば侵入できるような状態であった。私たちが普段目にする帰還困難区域による立ち入り禁止表示はほとんど看板であり、地面に直接書いてあるものは初めて見た。地面に警告があるだけで、放射能が目に見えないことに変わりはない。この地面の表示がある境界線の前と後だけで大きな差があるようには私自身は感じられなかった。立ち入り禁止であるならば、他の帰還困難区域と同じように柵やゲートを設け、物理的に侵入を防ぐ必要があるはずなのではないか。

侵入しようと思えば出来るようになってしまっている警告の甘さに、驚いてしまった。メディアでは復興という言葉を目にしやすいが、復興だけでなく、住民たちの安全をまず第一にするべきだ。安全性を保てていないような状況で復興だけ推し進めることが正しいと言えるのだろうか。



写真5

最後に檜葉町にある宝鏡寺「伝言館」について触れたい。「伝言館」には多くの資料が展示してあり、福島についてだけではなく、広島、長崎、ビキニについての展示も見ることが出来た。福島原発事故発生の原因はもちろん、福島原発が何故そもそも作られることになったのか、原発の神話性がどのように人々に浸透させられていったのか、資料を通して理解することが出来た。驚いたのは、展示されている資料の数と種類だ。以前の訪問で訪れた「東日本大震災・原子力災害伝承館」と比較しても、引けを取らないほどであったことに加え、展示する内容にかなり差があると感じた。というのも、「伝言館」はどちらかというと、原発事故発生の原因を、今までなされてきた東電や政府の杜撰な政策にあることを訴えていた。また、長崎

や広島の大原爆についての展示もされていたことで、核というものがどれほど恐ろしく、どれだけの被害が出てしまうかを全面的に出していたように感じた。

一方で「東日本大震災・原子力災害伝承館」の展示内容は、原発の仕組みや、事故が起きてしまった時の原発の状態がどのようなものであったのかを詳しく説明している印象が強かった。ここに政府や東電、そして地元住民の人々との間に大きな差があるのだとはつきりわかった。たしかに、「東日本大震災・原子力災害伝承館」では語り部の話を聞くことが出来るスペースもあれば、原発神話の崩壊といった、原発事故を人災と記載されていた展示があったのも確かだ。しかし、「伝言館」程の印象は残らなかったように感じる。「伝言館」は隣に「未来館」という、同じく原発反対を訴える展示がなされている建物も並んでいてのだが、両方の館を見ることで、私たちに真実を訴え、二度とこういった事故を起こさぬよう、後世に引き継いでいかなければならないというような意志を感じた。「伝言館」の資料は個人によって集められたものもあったりと、公の場では見ることができない展示物も見ることが出来る。原発事

故の真実を知るためにも、是非足を運んで見てほしい。

今回は五日間の中でも、特に印象に残った3点を記した。訪問3回目とはいえ、まだまだ現地を訪れる度に新たな発見が耐えない。また、変化する街の様子が見られる場所もあれば、最初に訪問した時とほとんど様子が変わらず復興が進んでいるのか疑わしいほど変化の見えない場所も存在する。しかし、徐々に分り始めたことは、震災から13年の月日が経った今、地元住民の方は『復興』というよりも、『まちづくり』や『地域活性化』にシフトしてきていると感じた。復興を続けていく必要があるのは確かだが、まちを盛り上げようと地域の人々は既に自分たちで動き始めている。私達も支援を続けなければいけないのもまた確かではあるが、支援にとらわれず、どういう町があるのか、1人の観光客として福島県に訪れてみたいと思うのも大切なことではないかと感じた。4月から4回生になる私が福島訪問に参加できるのもおそらく1、2回ほどだろう。いたいた機会を無駄にしないよう、次もまた新たな発見ができるよう、さらに広い視野を持って訪れたいと思う。



写真から福島を知る(3)

13年目の福島に 伺いました!!

2024年春

2024年春の訪問(2024.3.10~3.15)では、3.11に初めて福島に滞在することができました。震災からまる13年を迎える福島でみたこと、かんじたことをお伝えします。



▲3.11の日の出

福岡と福島の日の出の時間は、おおよそ40分違います。3月11日の福島での日の出は5時53分(福岡は6時34分)。とても寒かったですが、海側から上がる日の出は、とても印象的でした(「おれたちの伝承館(南相馬市小高区)」にて撮影)。



▲「ふたばいんふお」閉鎖

双葉郡8町村の民間情報センター「ふたばいんふお」が3月31日で閉鎖。

私たちの福島訪問でも随分お世話になりました。そして今回が最後の訪問となりました。また違ったかたちとなっても、復活したらいいと思います。



▲復興事業を示す看板

南相馬市鹿島区鳥崎(からすざき)にある震災前と現在を比較する野外看板。被災した漁港の整備、太陽光と風力発電、防風林と防波堤の整備などが進められているようです。

震災から13年を経ているわけですが、復興はまだこれからという印象です。



▲村上海岸の防波堤

南相馬市小高区の小高海岸を初訪問。かつては海水浴場として賑わったようです。今は防波堤とテトラポットに囲まれ、かつての景色を留めてはいません。この日の波は風もあって高かったですが、この何倍もの高さの波が迫ってきたかと思うと、ただただ唖然とします。



▲海岸近くの風力発電

海岸線近くに建てられた4基の風力発電(万葉の里風力発電所)を初めてみました。あまりに大きく(羽根の中心まで85メートル)、九州ではあまりみかけないので驚きました。そしてこの電気は、どこに送られているのでしょうか。



▲ろうそくイベント

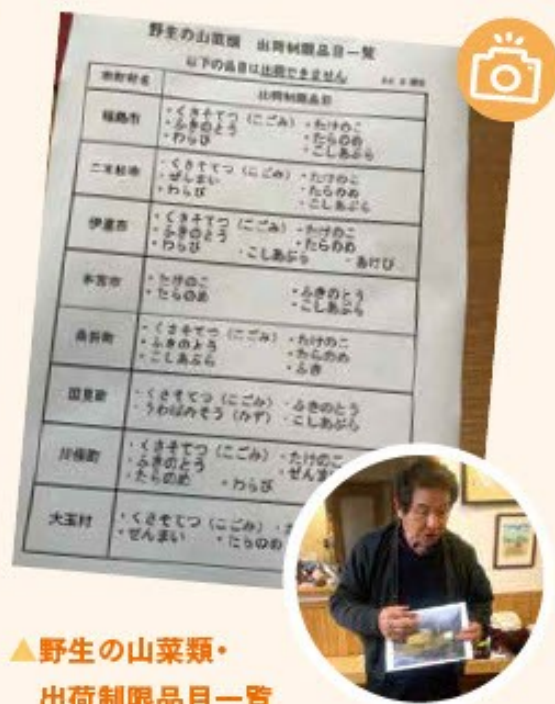
JR小高駅近くでは、3月11日夕方ごろから火を灯すイベントが行われていました。気まぐれな風に翻弄されながらも1時間近くかけて完成しました。福島のはとは粘り強いと思いました。



▲雪道での車運転を初体験

双葉郡葛尾村に宿泊した日の朝は、道は一部凍っていました。雪道での運転は、初でしたので、山道の下りは、ソロリソロリと下りました。対して地元の車は、雪道でもスピードが速くてスゴイ。

今回の訪問では、雪の福島県を体験することができて、少しだけ東北の冬を味わえたかなと思いました。



▲野生の山菜類・

出荷制限品目一覧

二本松市の有機農家である菅野さんからみせてもらった資料です。表のとおり今でも山菜の出荷は、できないんですね。

同行者プロフィール



せりたひろし

広告デザイナー
中間支援NPO理事

NPOやNGO、社会福祉協議会など非営利組織の広報ツール製作を多く手掛ける。最近は広報研修や講座の講師も精力的に務める。

福島訪問の同行は、今回5回目となりました。福島では写真の撮影も多いですが、もっと上手になりたいですねー。



公式インスタ



📷 同行してみて

初めて3.11を福島で過ごすことができました。印象的だったのは、イベント中ローソクに火がなかなかつかなかったのですが、地元の人たちは何度も何度も消えては点けて消えては点けてを繰り返していました。

実に辛抱強いというか、私たちも手伝ったのですが、すぐに諦めモード(苦笑)。その最中に「私たちこうやって13年やってきたよねー」という小さな声があちらこちらで聞こえてきました。

福島の人たちの一面を知ることができた出来事でした。

【参考サイト】

東京新聞社



飯館村農民見習い 伊藤延由

福島だより 飯館村の春

1. 飯館村

飯館村は福島県相馬郡に位置する。面積230平方キロメートル、原発事故前は人口約6,500人(約1,700世帯)の村。因みにほぼ同じ面積の大阪市(225平方キロメートル)は人口277万人を擁する。この人口密度からも「日本で最も美しい村連合」に加盟が許されている村であることを理解頂けると思います。



ふきのとう

2. 自然豊かな村

原発事故で2011年4月村は全村避難となり福島市など近隣自治体での避難生活が始まりました。2017年3月末に一部を避難指示が解除されました。しかし、現在の帰村者は30%弱に留まり、現在も避難先に止まっている。帰村者の70%は60才以上の村になっている(2024年3月)。

飯館村の春は遅い、標高400m〜500mの村の春は4月中旬頃から始まる。桜はGW頃が盛りになる。

飯館村の魅力の一つは豊富な自然の恵みだ、雪が解けると“ふきのとう”から始まり次から次と芽吹く。

食いしん坊な私にはとても魅力的な村でした。今晚のメニューは山菜の天ぷらと決めたら、屋敷内を一回りしてくると、ふきのとう、こごみ、タラの芽、山ウド…が採れる。

飯館村は貧しい村?、福島県の貨幣経済下の統計では下位に位置する村でした。しかし私が付き合った村人から“貧しさ”を感じることは無く、私のようなよそ者にも優しく対応してくれる人たちから心の豊かさを感じました。



こごみ(草ソテツ)

それは、三世代同居(中には四世代同居も)の割合が高く、祖父母が孫の面倒を見て、若手が企業に勤め現金収入を得て、土日には農業でコメ作り、野菜作りを行う。食費で現金を払うのはたまに買う肉や魚程度でした。その肉や魚も、有害鳥獣駆除で捕獲された猪肉や狩猟で捕れた野鳥など、近くの川で捕れたヤマメやイwanaも食卓に上りました。お年寄りの話を聞くと食費の4割ほどは自然の恵みだったと言う事にも頷けました。

そして、食卓が豊かな訳、それは自然の恵みがもたらしたもので、5月頃から、ワラビ、フキ、山ウドなどを採取し塩漬け保存します。秋から冬にかけて野菜が無くなるころ出でてきて塩出しをして調理し食卓に上るのです。

種目	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年
ふきのとう		2,483	319	201	108	70	51	26	46	30	20	28
(沼平)				143	201	51	31	20	87	32	26	32
山ウド	81	72	103	62	7	6		ND	ND	ND	ND	ND
タラの芽		320	779	295	793	26	58	14	41	16	24	23
コシアブラ			35,593	270,238	61,727	19,455	20,620	12,304	16,383	10,952	17,493	20,870
ワラビ		1,503	269	3,047	916	960	662	266	382	228	245	318
ミズフキ		446	452	410	399	210	110		99	98	67	70
ハチク		3,642	797	512	307	714		340	386	175	110	58
茗荷竹			19	37			12	5	ND			
コゴミ		197	6,004	3,481	1,587	2,301	637	1,019	952	221	314	718
シドキ		158	515	1,984	242		45	31	16	20	17	19
ぜんまい							1,102	347	358	254	229	174

飯舘村内産山菜の汚染の測定結果

人の幸せは“金”でない事がお分かり頂けるとおもいます。私のように村外から入ってきた者には素晴らしい環境ですが、村の人たちにとっては“当たり前”でした。私は新潟市に住んでいたところは、シーズンになると車で1・5時間も2時間も掛けて山菜取りに出かけていましたから。

3. 原発事故がもたらしたもの

この豊かな自然の恵みが一瞬にして恵みで亡くなりました、それは13年前に起きた東日本大震災とそれに続く福島第一原発事故による放射性汚染です。

飯舘村は地震に強く、震度6強の地震にも倒壊家屋ゼロでした、飯舘村の災いは3月15日夕刻に襲った放射性物質を含んだ雲が村を覆ったとき雨になり夜半から雪になりました。

大雑把に言うと、15日午前中は陸から海に向かっていった風が、午後からは海から陸に向かう風に変わりました。事故現場で放出された放射性物質を含んだ雲が飛んだ先で雨になり放射性物質を地上に降らせた、これが原発事故です。

降下した放射性物質は土壌を汚染し自然の循環サイクルに組み込まれました。そして植物は

放射性物質（主にセシウム）を栄養素として吸収し葉にため込み、秋には落ち葉になり地上に積もります、葉っぱは腐りますがセシウムはその場に留まり、翌年また根から吸収することになります。飯舘村では13年を経て腐葉土が最大の汚染源になっている。

4. 山菜の汚染は続く

表は2012年から村内産の山菜の汚染を測定の結果です。

全体的には汚染の低下傾向が見られます、要因はセシウム134（半減期2年）が消えたのが寄与しています、残る汚染源のセシウム137（半減期30年）が消えるのに約300年掛かりその間汚染が続くのが原発事故です。



プロフィール

伊藤 延由
(いとう のぶよし)

1943年 11月生まれ
2010年 飯舘村の農業研修所「いいたてふあーむ」の管理人に就く
管理人の傍ら、水田・畑を耕作
2011年 2年目の準備を目前に被災
6月末福島市内へ避難
11月「飯舘村新天地を求める会」を立ち上げ活動



今回はベラルーシの春の美しい景色をご紹介します。

紙面の都合上紹介できなかった写真はwebサイトにて公開しています。

3月だより

今年(2024年)は春の訪れが早いミンスク。3月になると、太陽が出る10℃前後の暖かい日が続き、もう雪を見ることはほとんどありません。

3月8日の国際婦人デー(祝日)も快晴で、町中プレゼント用の花が並べられていました。家族、恋人、友達、先生、同僚...の女性を祝う風習があります。外に出ると、春の陽気をより身近に感じられます。〈パーク・テリュースキンツェフ〉公園でも、観覧車やジェットコースターなどのアトラクションはまだ動いていないものの、自然(緑)のなかをはずむ足取りでゆっくりと歩いて散策を楽しめます。

この時期は、日本文化の根強い人気も感じます。

国際婦人デー前後あたりから数週間、中央映画館ではジブリ作品〈耳をすませば〉が上映されました。派手なアクションシーンがなくとも、思春期の心の内面を美しく描いたこの作品はこちらでも深く共感され、エンディングで主題歌〈カントリーロード〉が流れはじめても席を立たない観客がほとんどでした。3月17日(日)には秋田犬展覧会が行われ、お世話になっている(通信No.125のコラム・インタビュー記事とNo.130のコラム掲載の)タチアナさんからも(彼女がハンドラーとして参加した秋田犬が優勝したという)嬉しいニュースが入ってきています。

和食ブームはずっと続いており、様々な日本料理が出されるいろいろなお店があります。アジア料理店〈ゼン〉のフルーツ味“モチ”や〈マルミ〉レストランの“刺身”、“握り寿司”、“焼き鳥”など。

暖かい風景が美しい春季のミンスクです。



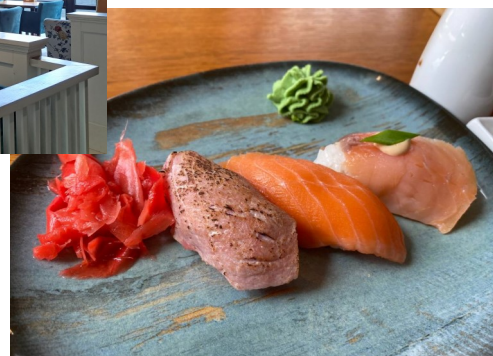
国際婦人デー(3月8日)には女性へのプレゼント用の花がある伝統的な風景



現地の秋田犬展覧会にハンドラーとして一緒に参加した犬と優勝したタチアナさん
(本人提供写真)



様々なアジア料理が楽しめる
[マルミ]レストラン
席はゆっくりとくつろげる
スペースとなっています



[マルミ]レストランの
握り寿司(提供写真)

4月だより

春の訪れがとても早い今年（2024年）のミンスク。日中の気温は15～25℃まで上がり、まるで夏が来たかのような暑さを感じることも。そのため、現地の桜も4月中旬には開花しました（例年だと5月初め頃）。ミンスクで“お花見”できる場所は基本的に三ヵ所です。



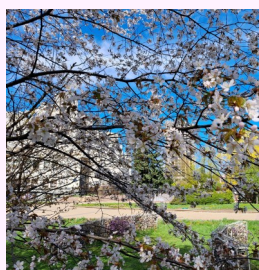
1932年オープンの中中央植物園

入場口から左の道を行くと桜の木が見えてきます。そこに咲き誇るホワイトピンクの花びらとバックにある緑の木々、快晴の青空とのコントラスト美は見飽きることがありません。この他にも、広大な敷地内に様々な花と植物、モニュメント、“白鳥の湖”があり、自然を満喫できる絶好の散策スポットとなっています。



1978年開園の〈友好と人民の公園〉

公園内に植え付けられた桜並木にも遠目から見てすぐ分かるようサクラが開花しています。ここの花はより白に近いピンク色といったところでしょうか。親子連れが多く小さなお子さん達の遊び場で、開放的な犬の散歩コースともなっています。



2002年に仙台市とミンスク市の姉妹都市提携(1973年～)を

記念してつくられた〈仙台公園〉

ホワイトピンクの花びらが咲く木もあれば、濃いめの桃色が鮮やかなサクラが開花した木もあります。東洋的なデコレーションが施された園内に“Citizen”社製の太陽光発電の両面時計台が仙台とミンスクの現在時刻を示すなど日本色豊かな憩いの広場です。

今の時期、ミンスクで咲く桜の木の下には、その美しさを写真におさめたり、記念に自撮りしたり、自分の大切な家族や友達と一緒に観賞する人でいっぱいになります。その幸せそうな姿を見ると、とてもあたたかい気持ちとなり、春を肌で感じとれます。



ウェブサイトではベラルーシで暮らす人々

へのインタビュー記事公開しています。

2024年3月は本格和食レストラン「サカグチ」を経営するメインシェフ坂口圭太さんとマネジメント担当ダリヤさんのご夫婦にお話を伺いました。お二人の出会いから、これまで力を合わせて頑張ってきた東京～ミンスク物語、などたっぷりと語っていただきました。



坂口さんとダリヤさん

アクセスは
こちらから



たくさんのご支援を
ありがとうございます

(順不同・敬称略)

合計

*活動支援金	355,393円
*のぞみ21カンパ	281,393円
*雪だるま3号カンパ	0円
*東日本支援カンパ	3,000円
*おまかせカンパ	16,000円
*福島訪問カレンダー	13,000円
*福島訪問の交通費一部	0円
*福島県産米10キロ	3,000円
*あじさいの会	3,000円

(2024年2月～2024年4月分の寄付内訳)

口座受付寄付

石川睦枝 伊藤達郎 榎本みつ枝 川崎清美 黒川富秋 小西由起 坂口馨子 佐々木悦子 関根敏子 高嶋幸雄 立石まこと 佃あけみ 西嶋香穂子 古本募金きしゃぼん(運営:嵯峨野株式会社) 松井岩美 村上和代 目黒文 本岡眞利子 山田秀子 和田政子

貴重なご寄付をお寄せいただき、ありがとうございます。皆様よりお預かりしたご寄付は、チェルノブイリ被災者医療支援、福祉工場のぞみ21支援、東日本震災被災者支援、事務費用等にあてさせていただきます。
※通信へのお名前掲載をご承諾いただいた方のみ、ご掲載しております。

〔都道府県別〕

【東京都】 1名	【新潟県】 1名	【栃木県】 1名
【静岡県】 2名	【愛知県】 1名	【鳥取県】 2名
【島根県】 2名	【広島県】 1名	【山口県】 1名
【愛媛県】 3名	【福岡県】 13名	【佐賀県】 1名
【熊本県】 1名	【大分県】 1名	【宮崎県】 1名
【鹿児島県】 1名		

計33名(匿名含む)

●月々の定額寄付(マンスリースポータの皆さま)

相羽美香子 磯道綾子 一瀬和美 伊藤利恵 稲田照子 井上礼子 内野千鶴子 延壽富美 大麻卓子 大久保伸子 大崎知恵 太田昌子 大場満 小黒慈子 落石久子 片山富美子 金山涼子 紙森優子 亀川早苗 河上雅夫 川崎君子 川尻愛子 木村雅子 倉掛大輔 古賀輝洋 古賀尚子 財津耐代子 財津悠子 斉藤美代子 阪口香奈子 佐藤一江 佐藤進一 佐藤照子 白浜千恵子 末永浩子 首藤展子 高山知佐子 竹田恵子 武田孝子 田中京子 珍部千鳥 土持秀男・由利子・朱加 網脇牧子 富永隆史 鳥井原桐子 鳥原良子 永尾ゆかり 中島幸代 中島まゆみ 永野沙智子 西首延子 納富育代 深川哲臣 福井初子 福本勲子 藤本孝子 湊田三輝 古川恵子 松尾智恵子 松木幸美 松永庸子 丸山子より 水本敬子 三野桂子 宮野義治 村西美由紀 室屋芳乃 山下澄子 山本亮輔 吉田美抄子 渡邊久美子

計104名(匿名含む)

編集後記

2021年に開始した福島訪問も今回で7回目となりました。訪問を通して多くの方と知り合うことができ、とても感謝しています。これからもこの繋がりを大切にしていきたいと思っています。(K・T)

お願い

住所を変更された方は、事務局までお知らせください。

クレジットカードで
寄付ができる
“Syncable
(シンカブル)”
を導入しています。



チェルノブイリ通信のペーパーレス化を進めています

環境負荷軽減および経費削減のためペーパーレス化を進めています。団体ウェブサイトでの閲覧へ変更していただける方は大変お手数ですが、メールやお電話等で事務局までお名前とご住所をお知らせください。

メール jimu@cher9.org

電話・FAX 092-260-3989

また、会報発行のお知らせメールをご希望される方は合わせてメールアドレスもお知らせください。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

横書きのweb版
できました！

